

江戸はこうして造られた

四谷の町並みの変遷



■四谷見附

現在の土木学会がある外濠公園は、寛永13年(1636)の江戸城外濠普請により、赤坂溜池と市ヶ谷の開析谷を繋ぐように台地部を開削して作られた。江戸城の外濠のなかでは最も高位であったが、玉川上水の残水などが流れ込んで水面を形成していたとみられる。続いて寛永16年(1639)には四谷見附門が築造された。江戸城下と城外を隔てる堅牢な城門(柵形門)の一つであり、防衛上の理由から橋だけが甲州街道とは筋違いに土橋で架けられていた。四谷見附は江戸城下の出入り口に位置し、江戸城にとっては搦め手の要衝として武家屋敷が並ぶ麹町の通りと境を隔てていた。

■四谷界限

時代が下るにつれて四谷界限は商業地としての賑わいを見せ、内藤新宿から四谷大木戸を経て四谷見附へと至る甲州街道沿いの道筋には、甲州や信州からの農産加工物資が送り込まれ、江戸から各州には呉服や焼き物類などの生活物資や農具などの生産物資が送られ、これらを支える各種の市場や伝馬町などの町屋が広がっていた。四谷界限は台地のため水害はなかったが、火災は寛永17年(1640)から慶応2年(1866)にかけて、大小62回を数える。だが、そのたびに再建した町並みはむしろ賑わいを増し、時代の変った明治期以降もこの界限は「山ノ手第一称スル繁華」の景況を誇った。

■甲武鉄道と四谷見附橋

明治5年(1872)に見附門は取り払われたが、道筋はクランク状に筋違いになったままであった。明治27年(1894)、江戸城の北側の外濠に沿って甲武鉄道(後のJR中央線)が開通。その際、工事用の残土の一部が四谷外濠に処分されたという記録があるが、当時の絵葉書や地図を見る限り、お濠の水面はまだ保たれている。

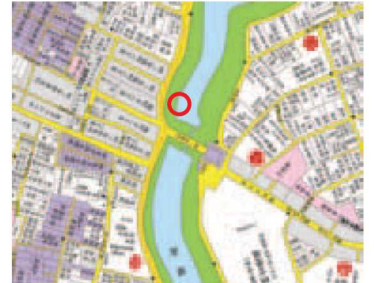
しかし明治32年(1899)、淀橋浄水場の完成により、淀橋から四谷に至る玉川上水路には水が流れ難くなり、四谷外濠は水源を失う。明治36年(1903)には外濠沿い(御茶ノ水~赤坂見附)と甲州街道沿い(半蔵門~新宿)に路面電車が開通。明治42年(1909)には赤坂離宮が完成し、これに相応しい橋として大正2年(1913)にバロック調の鋼製アーチ橋「四谷見附橋」が完成し、甲州街道と麹町の通りが直線で繋がられた。

■四谷外濠の埋め立て

大正12年(1923)、関東大震災が発生、四谷界限には大きな被害はなかったとあるが、昭和4年(1929)関東大震災に伴う復興事業により、四谷外濠には大量の瓦礫が持ち込まれて埋め立てられ、空濠となって名称だけが残ることとなった。また、昭和20年東京大空襲では四谷一帯も焦土と化したとある。その後戦後復興、高度成長、バブル期を経て現在に至っている。

参考文献『四谷区史』四谷区役所 1934

『地図に見る新宿区の移り変わりー四谷編ー』新宿区教育委員会 1983



安政3年(1856)の四谷
(「江戸重ね地図」エービーピーカンパニー提供)



現在の四谷
(「江戸重ね地図」エービーピーカンパニー提供)



明治4年(1871)の四谷見附門
(「よみがえる四谷見附橋」土木学会 1993)



竣工時の四谷見附橋全景
(「よみがえる四谷見附橋」土木学会 1993)



四谷駅付近を走る甲武鉄道
(「よみがえる四谷見附橋」土木学会 1993)



大正10年(1921)の東京を鳥瞰ー土木学会の位置にはお濠の水面が見える(「大東京鳥瞰図」都立中央図書館蔵)